

炎天河

- ENTENKA -

題字 大東 守

写真と文 池内文藏



第十三話 激闘！玉串川

「源八」こと八尾顕幸は、楠根川に架けられた仮設の橋を渡りながら「義兄上も余計なことを」と舌打ちした。かれの跨る黒鹿毛の轡を「マサカリ担いだ金太郎」の末裔を称する坂田金五が取り、右隣には重藤の弓を携えた「渡辺綱の生まれ変わり」を自負する渡辺猛が愛馬に揺られている。

決戦予定地は、玉串川の西岸（現在の山本球場付近）で、八尾勢はその由来となった「矢尾」の字の如く自慢の矢戦で、玉串川を渡って来る楠木勢を川に沈める作戦だ。当時の玉串川は幅が500m近い大河で、大和川（現在の長瀬川）とともに河内の暮らしの源だったが、「大和川は八尾」「玉串川は楠木」と認識する楠木党に対し、玉串川の西半分は八尾のEEZ（排他的経済水域）と主張する八尾党の間で度々大規模な小競り合いが展開されていた。朝靄が煙る苧田の中を、顕幸主従を中心に弓隊・騎兵・歩兵計100余が続く。「稲刈りが終わり次第」というのが双方暗黙のルールだった。

彼らから数100m離れて「余計なこと」をした源八の義兄・平野将監重吉とその郎党たちが続く。将監は実質初陣となる源八の目付け役を舅・八尾別当顕正から頼まれ、退却時の障壁

となりうる楠根川に急ごしらえの橋を架けた。が、先をゆく毬栗頭に「退却」の二文字は無さそうだ。将監は大きく呼吸を吸い込み、兜の緒を固く締めた。

主従が、現在の山本球場のバックスクリーン付近に到達した時、朝靄のなか、馬の嘶きと共に玉串川西岸の堤上に「白馬の騎士」が現れた。距離約600m。一騎だ。

「そこに見えるは多聞丸か、我こそは清和天皇第六の皇子・貞純親王嫡男・六孫王源経基の嫡男・満仲を祖とする清和源氏の嫡流。その中であって大江山の酒呑童子退治をはじめ数多の武勇を誇る源頼光の末裔、八尾別当顕正が嫡男源八顕幸なるぞ」と、古式に則った長ったらしい「名乗り」を挙げたのに対し、白馬の騎士はただ一言

― 神宮寺小太郎正房 ―

と名乗り、馬上弓を番える。神宮寺といえは現在の近鉄大阪線恩智駅―法善寺駅間の東高野街道沿いを領する楠木氏の一族で、小太郎正房は、多聞丸改め多聞兵衛正成の又従兄に当たる。源八は「多聞丸め臆したか」と嘲笑を浮かべ、傍らで弓に矢を番える渡辺猛に横目で合図した。

小太郎も白馬の上で矢を番え、斜め上に構える。合戦前の「鏑矢の儀式」だ。距離約500m、ほぼ同時に放たれた矢は朝焼けの中で行き交い、猛の矢は小太郎の弓に弾かれ、小太郎の矢は、主従の上空から急速に落下し源八の額を直撃した。

「わっ」と声を上げたのは従者二人で、源八は馬上で目を回していた。金五が拾い上げた鏑矢の先には、拳大の石礫が縛り付けられており、額当てがなかったら、毬栗頭は割れていたはずだった。騒めく八尾勢を鎮める為に将監が馬を進めた時「おんのれえ」の怒声と同時に30人ほどの弓隊が弓に矢を番えた。が、源八が星を見ていた間に「白馬の騎士」は何処かに消え、それに激高した源八が「放てえ！」と命じた。矢が玉串川の川霧に吸い込まれ、あちらこちらで何かに突き刺さったような音が響いた。源八の軍配で八尾勢が前進。川上と川下でも友軍の渡辺党とそれを迎え撃つ楠木方の水走党・志貴党が船上でまみえる音がこだまする。

徐々に薄らんでゆく川霧の中から現れたのは、何本もの青竹を結び付けた大盾を舐先に建てた楠木の船団だった。船団は荒縄で船同士を繋ぎ、ハリネズミの様に数多の矢を突き立てた状態で前進する。

「放て、放て、八尾の強弓こわゆみを見せてやれ！」そう叫ぶ源八の後で、将監は「あれはもしや…」と、頭の中で中国史の頁を捲った。

―赤壁の戦いせきへき(レッドクリフ)に於ける「連環れんかんの計」そして「草船借箭そうせんしやくせんの計」―
三国志演義さんごくしえんぎに登場する天才軍略家・諸葛亮孔明しよかつりやうこうめいが曹操そうそうとの決戦で用いた計略だ。

「やめろ！矢がもつたいない、というか敵に討ち返されるだけだ」

将監の叫びが八尾勢の雄叫びに掻き消される。その時、背後から駆けて来た別当顕正の郎党が、大和川を和泉の和田水軍みぎたが溯上そじようし、渡辺党の後詰に襲い掛かったと知らせて来た。

―まずい―将監は副将に本陣・新堂寺(後の常光寺)の救援に向かうよう命じ、源八を追った。そんなことも露知らず、顕幸主従は前進し、山本球場のバッターボックス辺りまで来た時、味方の矢が尽き掛けている事に気付いた。

―打ち返して来るか―将監は鎧あぶみの上に立ち、無数の矢を突き立てた青竹の盾を見ながら固唾を呑んだ、が、次の瞬間、縦は川面に叩きつけられ、水煙のなかで船を繋いでいた友綱が斬られ、その間から新手の船が現れた。

蒼穹そうきゆうに「菊水の紋」がはためく。各船には上半身裸の屈強な男たちが数名ずつ乗っている。最も川下に布陣した船の舳先に立った男が銅鑼どらを鳴らす。

―あれは確か、雉丸きしまる…―将監がかつて甘南備かんなんびの南江館みなみえで見掛けた多聞丸とその従者を回想している間に、半裸の男たちは様々なモーションで何かを投げ始めた。

「ぎゃっ」悲鳴があがって傍で郎党が倒れた。武器の正体もまた拳大の「石礮」で、次々に八尾勢の頭上を襲う。「生命を惜しむな名こそ惜しめ」が憲法の八尾勢も―石に殺されてたまるか―とじりじり退き始める

「おのれ、小癩こしやくな」鬼の形相で八尾勢の先頭に立ったのは坂田金五だった。かれは人一倍多くの石礮を浴びながらも「俺の先祖は、熊で乗馬の稽古をした足柄山の金太郎こと坂田金時だ」と名乗り、マサカリを左打ちに構え、大きい目の石礮を打ち返した。が、その打球ならぬ「打石」はファウル・チップとなり、渡辺猛の顎を直撃し、猛は泡を吹きながら落馬。

「馬鹿野郎、何やってんだ！」源八の怒声に一瞬青ざめながらも「今度こそ」と右打ちに変

えた金五は、飛んで来た石を強振（フルスイング）、次の瞬間悲鳴を上げ、仰向けで倒れた。自打球ならぬ「自打石」を右脚の「弁慶の泣き所」に当てたのだ。その痛みにはご先祖も耐えられまい。が、さらなる悲劇が起きた。痛みの余り手放したマサカリが空を舞い、程なく落下。主・源八の愛馬・黒鹿毛の尻に突き立った。

ーブヒヒヒヒヒン!!ー

凄まじい嘶いなききと共に疾風の如く駆け出す黒鹿毛。顕幸七歳の祝いに渡辺党が贈った奥州産の悍馬かんば（暴れ馬）である。制御不能となった馬上の顕幸を容赦なく石礫が襲う。程なくして顕幸落馬。ー源八だけは何としてでも！ー将監が馬を鞭打ち接近を試みる。石礫に討たれながら気を失った義弟に駆け寄った時、敵船の舳先は目の前だった。

ーもはや、これまでかーそう覚悟した時、

ー石投げ、やめいーの一声と共に、礫が止んだ。顔を挙げると、10mほど前の舳先に赤糸井緘の鎧を着用した若武者が、将監たちに気付かぬふりで立っていた。

その顔にも見覚えがあった。雉丸の主・多聞丸つまり楠木正成だ。

ーさっさと連れて帰れーという意味であろう。堤の上下から敵の騎馬武者の馬蹄と思しき轟音が近づく。将監は馬の鞍に顕幸を乗せ、その場を去った。

その夕刻、新堂寺の自室で目覚めた顕幸は、人目も憚はばらず号泣した。

出陣した100名余のうち、30名が帰っていない。その中には自らの両腕に等しい猛と金五も入っていた。黒鹿毛も行方不明だ。

ー猛、金五、黒鹿毛：すまぬ。ぜんぶ俺のせいだー

明日になれば、二人を含む30名の首級が30個の首桶に入れられて届くであろう。それが戦の世の習わしだ。将監は自身と郎党たちの手当をしながら、義弟が自害などせぬよう隣室で夜を明かすことにした。号泣は夜更けまで続いた。

ー泣くがよい、今宵はとことん泣くがよいー

安否不明の想い人を想う辛さは、いつの世も変わらない。

翌日、顕幸が目覚めたのは、昨日の出陣時刻をはるかに超えた現在の午前9時過ぎだった。

父、別当顕正の強烈な張手で目覚めた顕幸が顔を洗い、本堂に行くと、父は穏やかな顔で「楠木殿がお見えじゃ、いま、婿殿(将監)が山門で応対している」と告げ、眼で―お前も言
って来い―と告げた。「首渡しの儀式」に相違なかった。顕幸は覚悟を決め、丹田に力を入
れた。―猛、金五、よう戦った。よう帰って来た―涙は昨夜のうちに枯れていた。

山門をくぐった。たった一晩会わなかっただけで、懐かしい顔ぶればかりだ。

「おや？」

首桶が無い。いや；皆、首と胴が繋がっているじゃないか。どうということだ。顕幸の後から
出て来た父・顕正が大将と思しき武者にこやかに挨拶する。

「右衛門尉(正遠)どの、おはようござる」

「別当どのこそ、息災で何より。大切な御子らをお返しに参上した」

猛、金五らは石川源三郎に促されて申し訳なきような顔で、主・顕幸の周りを囲んだ。

枯れたはずの涙で、皆の顔が歪んで見えた。皆、応急の手当を受け、着衣も新しいものを与
えられていた。彼らの後から馬の嘶きが聞こえた。黒鹿毛だった。駆け寄った顕幸の毬栗頭を、
愛馬が愛おしそうに舐めた。その尻には嚴重に包帯が巻かれていた。

「よき戦いぶりでござった。今後もよしなに」と正遠。顕幸が「多聞兵衛どののは？」と尋ね
ると「あれはまだ寝ておる」とだけ言って正遠は去って行った。後から聴いた話では、正成は
初陣に際し、大量の青竹と石礫と、それ以上の量の薬草を調達し、戦が始まる前から煮炊きさ
せていた。昨夜は、雉丸改め佐介と共に、黒鹿毛の尻の治療に当たっていたとのことだ。

将監は正遠を楠根川まで見送り、共に笑みで別れた。楠木と八尾はこの後数回の小競り合い
を経て、共に笠置山に参じ、顕幸は「楠公八名臣」の一人として正成を支え、かれ亡き後は嫡
男・正行まさつらを支えた。顕幸はその天寿を全うするに当たり、この初陣での出来事を伝えた。正行
に受け継がれた温かい血が、日本赤十字社誕生に重きを為すのははるか後の世の事である。